

時の来たるを待つ

岩崎智彦

『 **悪い時が過ぎれば、良い時は必ず来る。おしなべて、事を成す人は、必ず時の来たるを待つ。** 』

これは、松下幸之助氏の言葉で、その冒頭の一部である。この後、「あせらずあわてず、静かに時の来たるを待つ。時を待つ心は、----- 」と続く。

2011 年 3 月の福島第一原子力発電所の事故から、はや二年が過ぎようとしている。この原子力発電所の事故がもたらした被害は莫大・広範なものであった。依然としてその渦中に置かれている方々の数の多さに驚きそのご苦労に、ただ頭を垂らすのみである。しかし、この原子力発電所の事故については、その原因・進展などを含め、いまだ多くの部分で未解明な部分が残っている。おそらくは圧力容器のふたを開けて内部を調査しないうちは、事故解明そして対策立案に至ることはないと思われる。それがなされるまでには、こののち少なくとも数年の時が必要であろう。国民目線から見たとき、真の原因追及・事故進展の解明を経ずには、原子力発電への信頼回復はないであろう。

そのことを踏まえるとき、原子力発電の将来について、今は、我々が語るべき時ではないと考える。私自身、おそらくほとんどの原子力の専門家、原子力発電が我が国において、必ずや必要不可欠であり、その再構築が必要であると信じている。しかし、今はそのことを秘すべきでないだろうか？ 専門家は今、口を閉じ、国民そしてその代表たる政治家が、「原子力を今後どうすべきか」について十分な議論すべき時期である。我々専門家はそれを待つ、いわば「まな板の上のコイ」となるべきである。一部の専門家にては、今だからこそ強く原子力発電をアピールしなければと考えられている。しかし私は、今はその時期ではないと信じる。原子力発電が真に有効なものであれば、自ずから良い答、「事故を起こす可能性はゼロではないけど、やっぱり原子力発電は必要だよ。」との結論にいたるであろう。我々はそれを信じ、今は黙し、その時をじっと待つべきである。

先の松下氏の言葉は次の一文で締めくくられている。

『 ---時を待つ心は、春を待つ桜の姿といえよう。**だが、何もせずに待つことは僥倖を待つに等しい。** 』

それでは、今この時期に、我々専門家集団は何をなすべきか？ それは明らかである。それは、原子力の再生を担っていくのは、今ではなく次の世代の専門家であるということから明らかである。今の我々の使命は、我が専門知識を、次の世代に伝える得ることである。

最後に、徳川家康の『遺訓』より。『 **願いが正しければ、時至れば必ず成就する。** 』